

事務職員のための E-labo

福岡大学
教育開発支援機構



プログラムの形式

プログラムは90分（勤務時間後）で全6回
参加対象は全職員（自由参加）
アクティブ・ラーニング型+モジュール型で実施
アクティブラーニング型・・・レクチャー+グループディスカッション
モジュール型・・・興味ある会のみ参加が可能

～教職協働の「はじまりのはじまり」～

プログラムのコンセプト

- 異なる職種・部署の連携の基盤となる「共通の知識（=大学についての知識）」を身につける
- 大学の「これから」を共に考えるために大学の「過去」と「現状」を知る
- 普段あまり接することのない職員同士の交流の場を提供する



Q1

「教職協働」はなぜ必要なのか？
今、「教職協働」が叫ばれる理由は？

Q2

大学はいつ、どこで、なぜ始まったのか？
大学の「もともとの姿」とは？
‘UNIVERSITY’の語源は？

Q4

「フンボルト理念」とは何か？なぜ重要か？ドイツの大学の歴史と現状は？
フランス、イギリスの大学の現状は？特徴は？課題は？
アメリカと日本の大学制度はどれくらい違う？背景となる条件はどう違う？
近代の各国の大学が共通に持つ構造的な問題とは？

Q6

大学を動かしているのは誰か？
大学の「ステークホルダー」たちは誰か？

Q5

日本の大学はどのようにして生まれた？
日本の大学制度は他国とどう違う？
日本の大学制度の特徴は？

Q3

職員として最近感じることは？
本学の現状と課題は？

Q7

文科省の政策は戦後どういう経緯をたどってきた？
文科省の政策を読み解くためには何を知ればいい？

「教職協働」のためのプログラムを 「教職協働」で創った作成過程

作成プロセス



プログラム作成のコンセプト

- 理論や歴史を、できるだけ具体的な現場の今日的な課題と引きつけて説明する
- 大学に関する知識や諸概念が、課題を考えるのに使えるものであることを知ってもらう
- とにかく楽しく議論ができる

プログラム作成のスタイル

- 職員もプログラム作りに参加（レクチャーの内容検討+ディスカッションテーマ選定）
- 職員は、各回に2名ずつ（主担当1名、副担当1名）
- 担当教員は毎回「課題図書」を選定（各回の主担当職員は課題図書を読み、レクチャーの内容を検討）

第三回「世界の大学」

課題図書
・潮木守一『世界の大学危機』中公新書,2004年

課題図書を読んだ感想

国によってこれほど大学の制度や運営状況が違うということを恥かしながら初めて知りました。この本には、4か国の大学の歴史の大きな流れが書かれており、各国の制度を学ぶことで、日本の大学がいかに「キメラ」なのかを理解することができました。

プログラム作りで意図したこと

課題図書を読み、各国の制度の違いを理解するのは大変楽しい作業ではありましたが、全てを理解するには大変時間がかかりました。この膨大な内容をどう90分のプログラムの中に組み込むか・・・が大きな課題となりました。

①まずは興味をもってもらおうこと！

各国の歴史について、時系列で説明するより、日本と比べて全然違う！と感じたところを中心に説明するようにしました。例えば、ドイツであればフンボルト理念！イギリスだったら、カレッジ！・・・等々。

②世界各国の大学の状況を数字で示す！

各国の大学状況を数字で表に示すことにより、各国の制度の違いをまずは目で見てもらうことにしました。例えば、大学数、学生数、進学率、授業料など・・・数字で示すと違いが一目瞭然！

雑感

時間の制約上、グループワークは行わず、講義のみのプログラムを実施したのですが、参加者の様子（そして何より、講師の須長先生の様子）を見て、大失敗だ！と感じました。興味を持ってもらうために様々な工夫はしたつもりでしたが、参加者は消化不良に陥っていたようでした。知識を提供すること、参加者の議論をしたいという気持ちに応えることのバランスがとれず難しかったです。「福岡大学をよくしたい！」と思って参加してくださっている職員の要望に応えるプログラム作りは、とても難しい！！

第一回「大学とは何か」

課題図書

- ・吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書,2011年
- ・金子元久『大学の教育力』ちくま新書,2007年

課題図書を読んだ感想

大学の歴史は繰り返される？一度19世紀に大学は没しかけたが、大学の質的变化（フンボルト理念）により大学は再生。現代も大学危機の状況から何らかの変化（政策）により復活は可能？

プログラム作りで意図したこと

1回目ということもあり次の4点に重点を置いたプログラムを検討

- ① 誰でも意見を言える議論のテーマを用意する
- ② 何を言っても不正解がないような質問をする
- ③ そもそも大学の起源など、大学がどうやってできたかを理解してもらう
- ④ それを踏まえて大学は原点回帰すべき？すべきでない？そもそも無理？

雑感

・初めて会う（話す）人もいる中で最初は緊張。アイスブレイク後は、段々と発言が増える。
・大学の起源を考える上で、現在の本学の課題を抽出することにより意見交換は加熱

第五回「大学の歴史」

課題図書

- ・天野郁夫『日本の高等教育システム 変革と創造』岩波新書,2003年
- ・橋本紘市『高等教育の政策過程 アクター・イシュー・プロセス』玉川大学出版会,2014年

プログラム作りで意図したこと

本学の「長期ビジョン」が策定された後だったため、高等教育政策について、本学のガバナンスの現状を含めた分かりやすいプログラムを検討

雑感

・大学職員として業務に大きく関わる高等教育政策の動向に関するレクチャー（→関心度が高く、興味津々。次回も楽しみ！）
・「福岡大学長期ビジョン（事務職員のための）」を「事務職員のためのe-labo」で創ってみては？

第六回「大学教育改革のキーワード」

課題図書

- ・濱名篤、川嶋太津夫、山田礼子、小笠原正明『大学改革を成功に導くキーワード30「大学冬の時代」を生き抜くために』学事出版,2013年
- ・中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」、2008年
- ・中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、2012年

課題図書を読んだ感想

この本を一冊読めば大学事務職員にとって必要な用語についての基礎的な理解はできるのでは？

プログラム作りで意図したこと

それぞれの答申のポイントと背景について、わかりやすく解説する。「学力」「カリキュラム」「ツリー」「ナンバリング」等の語句やツールについて、図や事例紹介も入れつつ、解説する。

雑感

レクチャーが中心だったが、答申や改革のためのツールについてなど今すぐ役立つ（旬な）知識を解説する回だったということもあってか、みなさん熱心に聴いていらつやっつように思う。ただ、若手職員にとっては用語の理解等少し難しい内容だったかも？！

成果！ 成果と今後の課題 課題！

- ・参加者：延べ169名（毎回平均約28名）
- ・参加者からの評価はおおむね好評（理解度、形式、テーマ、有用性）
- ・特に、職員同士のディスカッションや交流に大きな刺激を受けたようだ



- ・もっと参加しやすく！参加した職員の勤務年数に偏りがあり、特に中堅層が少なかった。
- ・多様な教職員の話し合いのための「共通基盤的知識」を提供できたかどうかは疑問・・・
- ・レクチャーで扱った内容の範囲が広すぎ、いささか消化不良に・・・
- ・もっと多くの職員に、プログラムを「創って運営する側」に回ってほしい！！